

【小説】もち volume
【イラスト】218 3



異世界魔術師は
魔法を唱えない

The another world's wizard does not chant.

試し読み版



BIGHORN NOVELS

C ⊕ N T E N T S

THE ANOTHER WORLD'S WIZARD DONE NOT CHANT

created by mochi and z18 presented by kill time communication
beginning novels series



【第一章】戦は終わらず、彼女はおらず

7

【第二章】つかの間の休息は、油断を誘う

41

【第三章】決戦へ向けて、勇者は動き出す

77

【第四章】北へ、北へ

107

【第五章】勇者の影に、敵は蠢く

139

【第六章】ただ愛する者のためにと、彼女は告げた

172

【第七章】戦いの終わりに、怨讐は消えず

208

【第八章】平和なるひととき、甘美なる罠

245

【第九章】別れの季節、始まりの時

279

【番外編】始まりは早く、終わりは永く 310

ジーン超魔導帝国 魔術一覧 324

第一章 戦は終わらず、彼女はおらず

皇帝がエルによって連れ去られて数日後、魔帝国北部地域の領主達が魔帝国皇帝の名の下にネイラー辺境伯を中心とした北部連合を結成したことは、帝都を占領して勝利の気分酔っていた王国軍にかなりの衝撃を与えた。

元々侵略国家であった魔帝国は征服した国の人間が反乱を起こすことを警戒していた。そのため皇帝が絶対的な権力を持っており、貴族達には自衛のできる最低限の武力しか保有を許さず、地方に課している税を重くして資金すら貯めさせないようにしていたのだ。

そのため一部を除いた地方貴族達は領地内でも碌に武力を揃えられないようになっており、王国軍に楯突けるだけの戦力を確保することは不可能だと思われていた。

王国軍側の人間は魔帝国軍を正面から破って帝都を占領した時点で、もはや王国の勝利は確実だと思っていたのだ。一度は捕らえた皇帝を逃がすということんでもない失態に王国軍の将達は顔を青く褪めさせ、勇者達も含めた緊急の会議が開かれることとなった。

※

参謀が現在の状況を話しているが、簡単に言えば現状は想定外だということだ。

自分達の領地と命が懸かっているのだ、帝都を占領されたくらいで抵抗が止むはずがないと思うのだが、他の人間はそうは考えていなかったようで、皆暗い表情を浮かべていた。

「そもそも何故皇帝が逃げ出せたのだ！ 地下牢に閉じ込めたとの報告が上がっていたのだぞ！ 誰の目にも留まらずに帝都を脱出するのは不可能だ！」

「隠し扉があつたのではないか？ 王族しか知らない通路はあると思うが」

「そもそも誰も皇帝が逃げる姿を見ていないとは、見張りの兵は何をやっていたのだ。もしやそいつが逃亡の手引きをしたのではあるまいな？」

「地下牢は一通り調べさせましたが、周囲に空洞はなく、外から侵入できそうな箇所もありませんでした。地下牢に繋がっている隠し通路がある可能性はないと考えられます。見張りに関しましては、交代の瞬間以外は常に牢を監視していたので、その隙を狙われた可能性が高いとのことですよ」

彼らが叫んでいるのは今回の失態の責任を誰かに擦り付けたいからだろう。このまま実行犯が見つかからないのなら、失態の責任は主に指揮官が負うことになると思うが、今回従軍している貴族達も王国に残っている貴族から糾弾されるのは目に見えている。

会議の進行役として選ばれたからには仕方がないのだが、怒鳴り散らすような貴族達の言葉を受けながらも慌てず冷静に返答をしていく参謀の姿には同情を覚えた。

他の勇者達の様子を窺うと、サガミは俺と似たような考えのようで、周りの反応に眉を顰めながらも自身は落ち着いていた。初めに一度だけ俺のほうを見てきたが、奴は一度転移を実体験しているので、皇帝の話を聞いてすぐに転移による犯行だと気が付いたのだろう。

アレクは周りに合わせて黙ってはいたが、周りに気付かれないよう俯けた顔には何やら嬉しそうな表情が浮かんでいた。奴が何を考えているのかは分からないが、経験からしておそらく自分の利

益になりそうなことでも思いついたのだろう。

参謀の話に特に奴の利益となるような要素は含まれていなかったと思うのだが、奴は一体何を考えているのだろうか。少し気になって窃思で奴の思考を読み取ろうと思ったのだが、その前に隣に座っていたフェアリスに腕を引かれた。

「ヤード様、彼女のことは伝えておいたほうがいいのではないのでしょうか？ 少なくとも皇帝が逃げることでできた理由と逃げ込んだ場所は推測できていますし……」

彼女とはエルのことだ。フェアリスにはエルが皇帝を転移で連れ去ったことは伝えてあるので、先ほどから居心地が悪そうに周りの様子を窺っていた。

「確かに伝えるのなら会議はもう少し早く終わるだろうな。尤も、そうなればエルは皇帝を逃がした罪で、私は反逆者を内部に引き入れた罪で二人とも王国への反逆者となっているだろうが。私も命は惜しいので、もしそうなった場合、この場の人間を始末して逃亡するつもりだ」

「あ……そうですね……」

自分の提案がどのような結果を招くのか理解した彼女はがっくりと肩を落として俯いた。

彼女には物騒な話を伝えたが、まだ王都の屋敷を引き払う予定はないので、もし彼女にエルのことを言われたとしてもこの場の全員の記憶を消すだけに止めるつもりだ。

「それにしても、何故このようなことをしてしまったのでしょうか……」

フェアリスはエルが裏切ったことで酷く落ち込んでいた。確かに彼女とエルは出会ったときからよく話をしていたので仲はかなりいいだろう。むしろエル以外に彼女の交友関係を知らない。

「そう落ち込むな。唯一の親友がいなくなった寂しさは分からんでもないが」

「な!？」

一応フォローしてやったつもりだが、俺の言葉を聞いた彼女は小さな声で叫んだ後、顔を真っ赤にして睨んできた。睨みながらも反論が出てこないところを見ると、俺の指摘は凶星なのだろう。

「わ、私だつて友人の一人や二人くらいいます！ 専属だつたメイドさんとか、教会の方とか……」
「仕事付き合えばかりだな。王宮か教会以外で気軽に話せるような友人はいないのか？」

「えっと……ナタリアさん……」

悩んだ末の答えが俺の関係者とは、フェアリスの交友関係の狭さは想像以上だつた。まあ勇者の中でも聖女と持ち上げられて人々から崇拜にも似た感情を向けられているせいで、対等に付き合える友人は作り難いと思う。彼女に親友がないのも仕方ないことなのかもしれない。

慰めるように頭をポンポンと軽く叩いてやると、あまりの恥辱に堪えかねたのか、威圧感がまるで感じられない目で俺を睨みながら、ぷるぷると身体を震わせていた。

もう少しからかってもよかつたのだが、先ほどからサガミが呆れた様子でこちらを見ているし、フェアリスのただならぬ様子が悪目立ちして周囲の目も集まってきたので止めにする。

周囲の視線に気が付いて縮こまるフェアリスのことを放っておいて再び会議に耳を傾けてみたのだが、俺が聞いていた内容から全く議論は進んでいなかった。先ほどから飛び交っているのは責任の擦り付け合いだけだつたようだ。

そんな子供のするような議論に痺れを切らしたのか、机を叩きながらサガミが立ち上がった。

「いい加減にしろ！」

普段から厳しい顔をさらに歪めながら、人が殺せそうなほどの威圧感を感じる目つきでこの場にいる全員を睨みつけるように怒鳴ると、それまで貴族達の間で無秩序に飛び交っていた糾弾の声がぴたりと止み、一瞬で会議の場が静まり返った。

「緊急会議を開いてまで話し合うのが責任の所在なのか？ そんなくだらないことを話し合うよりも、皇帝の逃亡先だろう北部連合への対応について話し合ったほうが建設的だ」

「た、確かにその通りですな」

サガミの雰囲気^{ふういき}に恐れをなした貴族達は、それまでの態度を一変させて愛想笑いを浮かべながら奴の言葉に追従^{ついで}していた。何とも都合のいい連中だとは思いますが、言葉にはしない。

「対策と言われましても、サガミ様はいかがお考えなのでしょう？ 敵軍から食料などを奪えたりとはいえ、我が軍は元々帝都の占領までを目的としていました。このまま北に進軍できるほど物資に余裕はなく、連戦による士気の低下も無視できません」

「参謀殿、帝都の治安維持のためにもそれなりの兵は残しておく必要があるが、それを差し引いても物資に余裕はないのだろうか？」

「ありません。元々軍の一部を占領後統治のため残しておく想定はしていましたが、帝都に留まる兵達の分と帰還する兵達の分は残してありますが、進軍するとなると到底足りません」

「そうか、それでは仕方ないな」

サガミは参謀の話を聞いて素直に席に着いた。奴も元は軍人なので、兵站^{へいたん}が整っていない状態で

進軍を提案するほど馬鹿な発言はしないようだ。指揮官も参謀とサガミの話聞いて納得したように頷いている。このままいけば帝都に最低限の戦力を残して、何事もなく撤退の準備に入れそうだ。だが折角撤退で纏まりかけていた空気の中、アレクが自信に満ちた表情で立ち上がった。

「サガミ殿の意見はよく理解できた。魔帝国軍との決戦は終始こちらが優勢のまま終わったとはいえ、確かに慣れない土地で兵達の疲労も相当に溜まっていることだろう。だがしかし、このまま帝都に帰還して、本当に魔帝国に勝利したと言えるのだろうか！」

堪えきれない内心を表すかのように腕を大きく振りながら喋るアレクの姿に魅入られたのか、今まで静観していた貴族達も奴の話に引き込まれるかのように次の言葉を待っていた。

今回は出兵してから終始大人しかったので、このまま余計なことを口走らないことを祈っていたのだが、どうやら俺の祈りは届かなかったようだ。

「国王陛下が我らに命じたのは、魔帝国を倒し、長年の因縁に終止符を打つことだ！　だが皇帝が逃げ出し、残った貴族も連合を組んで王国への敵対を止めていない！　我らはまだ陛下の命を果たしてはいないのだ！　ここで逃げ帰ったところで、臆病者と誇りそしを受けてしまうに違いない！」

「そ、そうだ！　我らは魔帝国を滅ぼしに来たのだ、中途半端に終わったまま帰れるわけがない！」アレクの言葉に感化された貴族の一人が声を上げると、他の者達も次々に同意を示した。

王国の貴族は未だに無駄な誇りや騎士道を捨てられない者が多く、この会議に参加していた人間にも、そういった考えの者が多かったようだ。

「アレク殿、先ほど参謀殿も言われたが、進軍を選べるだけの物資はないそうだ。攻めるにしても

王都からの追加支援を待つてからでも遅くはないと思うが」

「占領した町の民から徴発すればいい。元々魔帝国を支持していたのだ、これから何のお咎めもなく王国の庇護下に入るのならば、これくらいは尽くしてもらっても構うまい」

「それでは民の反感を買ってしまいます。今までは魔帝国の民であったとしても、占領後は王国の民になるのです。そんな彼らの恨みを買っては統治にも悪影響が出てしまいます」

「徴発するといつても、北部連合とかいう魔帝国の残党を狩るまでの間だ。多少の犠牲は厭わ^{いと}ない覚悟で臨まなければ、倒せる敵も倒せなくなってしまう」

サガミと参謀の言葉にアレクが反論するたび、周りの人間が賛同の声を上げて支援している。正論を言っているのはどちらかといえば二人のほうなのだが、調子に乗った今の奴に何を言っても考えを曲げることはできないようだ。

サガミの威圧感に押されて黙っていた貴族達も、内心では進軍を提案したかったのだろう。奴と同等以上の立場であるアレクが進軍を提案したことは彼らにとつて渡りに船だったというわけだ。

「ヤード様、このままでは進軍に決まってしまうのではないでしょうか……?」

あまりよろしくない方向に盛り上がっていく場の雰囲気^{ふんいき}に恐怖を覚えたのか、フェアリスは先ほどから無意識に俺の服を掴んでいた。

彼女も進軍は何とか止めたいと思っっているようだが、彼らを説得するためのいい考えは浮かんでいないようで、俺にこの場を収めてもらいたいと思っっているのだろう、瞳を潤ませながら俺の顔を見つめてきた。

彼女に絆ほだされたというわけではないが、俺としてもこの場を収めたい。あの様子ではサガミ達
止めてくれるのを期待するのも無理なようだ。俺は軽く嘆息してから立ち上がった。

「アレク殿、魔術師部隊はこれ以上の従軍は拒否させてもらおう」

「な、何故だ!？」

「魔術師は肉体的な疲労以上に魔力と精神力を消耗している。予定外の進軍をしても十全に働ける可能性はほとんどなく、まともに機能するから分からない部隊を出撃させるわけにはいかない」

今まで特に発言もしなかった俺が進軍に反対を表明するとは思っていなかったのか、アレクは自信に満ちた余裕の態度を崩して、少し焦ったように周囲を見回していた。

実際は使い物にならないほど疲弊しているわけではないのだが、門外漢の貴族達にはそんなことが分かるわけもなく、彼らは苦り切った顔でこちらを睨みつけてくるだけだった。

「決戦もすぐに終わり、従軍に支障が出るほど疲弊している魔術師はそれほど多くはないだろう。それにこちらに寝返った魔術師もいるのだ。動ける者だけ集めていけばいいのではないか？」

「確かに第二魔術兵团は王国側に寝返ってくれたが、先の決戦で姿の見えなかった第一魔術兵团は北部連合の指揮下に入っている可能性がある。本来魔術師は圧倒的に防衛戦のほうが得意なのだ。無策で突撃しても圧勝するどころか、返り討ちに遭う確率のほうが高いと思うのだが？」

「むう……」

「皇帝を取り逃がして焦る気持ちは分からんでもないが、急ぎ失態を取り戻そうとして無策で出撃させるのも相手の策なのかもしれないぞ？」

アレクはしばらく唸りながら考えを巡らしていたようだが、いくら考えても妙案は出なかったのか、降参するように頭を振つてため息を吐いた。十分な魔術師が確保できない状態で戦いに臨むのは無謀だと理解してくれたようだ。

そして進軍を提案したアレクが折れたので、奴に賛同していた貴族達もそれ以上進軍を強行するような発言はしなかった。これで無謀な突撃をしなくてよくなったと言わんばかりに参謀もこつそりため息を吐いたのが見えた。

「では北部連合への対応はどう致しましょうか？」

「相手がどう出てくるか分からない以上、予定よりも帝都に駐留させる兵数を増やして警戒態勢を取っておくのがいいのではないか？ 防衛に徹するならば現在動ける魔術師だけでも十分可能だろう。王国からの支援が届き次第攻勢に出ればいい」

「私もそれに賛成だ。まずは敵勢力を確認するための時間が必要だ」

とりあえず当たり障りのない意見を言ってみると、サガミもそれに賛同していた。アレクや奴に賛同していた貴族は多少不満が残っているようだが、気にするほどのことでもないだろう。

これで王都に帰ることができる。その後の細かいことはサガミ達に任せることにしよう。

※

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

煩わしいだけの会議も終わり、帝都で宿代わりに使っているグラン家の屋敷に戻ると、玄関先で俺の帰りを待っていたオリンピアが出迎えてくれた。

いつ帰ってくるかも分からないというのに、律儀に俺の帰りを待っていた彼女の忠誠心溢れる姿は犬のように思える。気まぐれに頭を撫でてやると、嬉しそうに顔を綻ばせていた。実際に犬を飼ったらこんな感じになるのだろうか。

ひとしきり撫でてから手を離すと、彼女は名残惜しそうな目で俺の手を見てきたがそれも一瞬のこと、すぐに真面目な顔つきに戻った。

「ご主人様、魔帝国軍第二魔術兵団は王国軍の指揮下に入ることになりました」

「そうか、指揮はお前が執るのか？」

「いえ、私は軍を辞めさせていただきました。当主の座も弟に譲ったので、何の気兼ねもなくご主人様に仕えることができるようになりました」

普通の人間ならば捨てるのが惜しくなるような役職や爵位でも、今の彼女は己の立場を縛るものとか捉えていないようだ。人格を操作して忠誠心を最大まで上げた俺が言うのも何だが、彼女の思い切りのよさには少々心配になってくる。

「帝都の様子はどうか？」

「平民には極力被害を出さないよう動いていたおかげで、今のところ落ち着いています。それと出入りの商人を通して商人ギルドから王国との交易を許可して欲しいと嘆願書を受け取っています」

「交易は私の権限で許可ができないので、軍に回してくれ」

交易を認めさせる代わりに物資の輸送を手伝わせば都合がいいとは思いますが、それは俺の関知するところではないので軍に丸投げしておく。

それにしても、ある程度は起こるだろうと予想されていた民の反発はなかった。帝都が王国に占領されたことに関して、民から特に不満の声は上がっていないのだ。これは元々魔帝国自体が実力主義的な政策を取っていたためだろう。

「民の反発がないのなら、ひとまず帝都を離れても大丈夫そうだな」

「ご主人様は王国に帰還するのでしょうか？」

「ああ、エルルの動向も気になるところだが……せめて転移を使ってくれば居場所の特定もできるのだが、流石に警戒されているようだ」

空間跳躍系の術式は、効果範囲の空間自体を捻じ曲げるその仕様上、完全に隠蔽することは不可能だ。精密探知を行えば一瞬で発生場所の特定まで可能となってしまう。現に帝都の地下牢には僅かに空間を捻じ曲げた痕跡が残っていた。

「おそらく一度はネイラー辺境伯領に向かったとは思いますが、有力な情報はありません」

「私やエルルほどの魔術師が本気で姿を晦くませたのなら、正攻法で見つけるのはほぼ不可能だろう。最低でも本人の術式抵抗を破れる強度の魔力探知が使えなくては話にならない」

「ご主人様ほど強大な魔術師はいないと思うのですが……」

エルルの搜索はほぼ不可能だという話を聞いて、オリンピックアの表情が曇った。特に情報収集を頼んだ記憶はなかったのだ、俺への点数稼ぎをするつもりだったのだろう。

偶然見つかる可能性もないわけではないので、搜索を止めるよう言うつもりもない。

予定が狂ったのか、悩み始めたオリンピックアだったが、ふと何かを思い出したように顔を上げた。

「そういえば、エヴァーツ侯爵夫人とその娘二人はどう扱えばいいのでしょうか？」

「ああ、今はどうしている？」

「帝都襲撃の混乱に乗じて失踪した事になっていますが、現在はこの屋敷で軟禁中です。ただ彼女達は帝都では有名なので、このまま匿い続けるのは少し無理があるかと」

「ふむ、お前も王都に連れていくと、彼女達を匿ってくれる人間がいなくなってしまうな……」

三人とも人並み以上の美人であるだけでもそれなりの価値がある。さらにセリアとクレアはあのエヴァーツ侯爵の血を引いているので、魔術師としての才能も期待できる。

元はエヴァーツ侯爵に復讐するために利用しただけだったが、支配^{ドミナート}まで使って手に入れた彼女達をここで手放すのは惜しい。

「オリンピックア、メルヴィナ達のところに案内してくれ」

「分かりました」

彼女は俺の言葉に頷くとすぐに目的の部屋へと歩き出した。

エヴァーツ侯爵に復讐を遂げた後、しばらく彼女達と会っていなかったのだが、機嫌を損ねていないことだけ祈っておくことにしよう。

オリンピックアの家内で目的の部屋へと到着すると、どうやら三人とも茶を嗜んでいるところだった。メイドが彼女達の世話をしている光景はおよそ軟禁中とは思えないが、侯爵夫人とその令嬢であることを考えるとこれが普通なのかもしれない。

三人は部屋に入ってきた俺をきよんとした顔で見ていたが、まず初めにクレアが我に返り、俺

を押し倒すような勢いで抱きついてきた。

「ヤード様、あれから全然会いに来てくれなくて、とても寂しかったのですよ！」

「済まないな、こちらも色々忙しかったのだ」

頬を膨らませて感情を表しているのは幼さを感じさせるが、母親似の少し潤んだ垂れ目で上目遣いにこちらを見上げてくる姿には、女性の色気を感じなくもない。

苦笑しながら頭を撫でてやると、オリンピアと似たような反応を返してきた。

「あ、クレア！ 抜け駆けなんて卑怯よ、離れなさい！」

「嫌です！ 今日是一日中ヤード様にくっついていきます！」

妹に続いて姉のセリアも近寄ってくると、俺に抱きついていて妹を引き剥がしに掛かった。姉妹の仲がいいのは分かるが、オリンピアという他人の目があることを忘れていた。まだまだ母親のような大人の女性には程遠いようだ。

姉妹がじゃれ合っているのを眺めていると、メルヴィナもいつの間にかすぐ近くに立っていた。

「お久しぶりですね、ヤード様」

「ああ、戦争中とはいえ不自由な思いをさせて済まない」

「いえ、お気遣い感謝致します」

下品にならないよう儂げに微笑んでいる様は、まさに淑女と言わざるを得ない。侯爵夫人ともなれば、伊達に貴族社会の中で生きてはいないということなのだろう。

「ヤード様はこの後、何かご予定でも？」

「いや、先ほど会議を終えて戻ってきたところだ。何か問題が起こらない限り、用事はない」

「そうですか。ちょうど今娘達とお茶を嗜んでいたところなのです。よろしければヤード様も一緒にいかがでしょうか？」

メルヴィナはさりげなく胸の谷間へと挟むように俺の腕を取ってきた。彼女のドレスは胸元が大きく開いているために素肌が直接当たり、その人並み外れた巨乳が俺の腕で潰されて形を変え、柔らかに温かな感触を伝えてくる。

彼女の素晴らしい胸の感触をもう少し楽しんでいたかったのだが、それは唐突に割り込んできたオリンピアによって中断されてしまった。

「お茶以外にやることがないからといって、昼間から畜生のように盛ってご主人様を誘惑するのは止めてもらえませんか、侯爵夫人様？ ああ、もう侯爵家は潰れたも同然でしたね、済みません」

オリンピアは明らかにトゲのある言葉でメルヴィナを詰っていた。二人は元々対立していた家同士なので、あまり仲はよくないようだ。尤も、嫉妬が混ざっているせいでもあるのだろうか。

「疲れを癒して差し上げようとしていただけなのですが、ヤード様をお茶に誘うのに貴女の許可が必要なのでしょうか？」

「貴女方三人は軟禁中なのですよ？ 少しは自分の立場を理解して欲しいものですな」

「ヤード様、オリンピア様はどうやらご機嫌斜めなようですので、お茶は私達だけで楽しむことにしましょう」

「あ、お母様！ 私もご一緒します！」

「私もヤード様とお話ししたいです」

不機嫌な様子を隠しもせずに嘔み付いているオリンピックアとは違い、メルヴィナは相手の言葉を半分聞き流して微笑んでいた。そこに追撃のように娘二人も加わったことにより、完全にオリンピックアが劣勢となっていた。

悔しそうに三人を睨みつけている姿を見て、同情を表すように頭に手を置いてやった。家の関係で仲が悪いのは仕方がないが、少しはお互いに歩み寄る努力をして欲しいと思う。

「お前の気持ちも分らないではないが、茶に誘うくらいは許してやれ」

「……はい」

渋々といった感じだが、まずはこの程度でいいだろう。

オリンピックアの言葉を聞いたメルヴィナは、話をついたとばかりに俺の腕を引いて席へと案内し、セリアとクレアが俺の両隣にすばやく着席した。多少強引な気はするが、元々参加はするつもりだったので、少々のは気にしないようにする。

席に座った俺にメイドがティーカップを差し出してきたので、受け取って飲んでみた。出された茶はハーブティーだったようで、爽やかな香りと味で疲労が幾分か取れる気がした。

「ヤード様、いかがでしょうか？」

「ああ、たまにはこうやって茶を嗜むのも悪くないな」

そうしてしばらくは茶と菓子の香りと味を楽しみつつ、俺の話を聞きたがるセリアとクレアの相手をしてゆつたりとした時間を過ごした。そして話がひと段落した頃、彼女達に会いに来た理由を

話すことにした。

「私はそう遠くないうちに王都へ帰還することとなるだろう。その際オリンピックアも連れていくことになっているのだが、そうするとこの屋敷でお前達を匿うことも難しくなってくる。そこでお前達を王都に連れていこうと思うのだが、どうだろうか？」

「ヤード様のお屋敷に、でしょうか？」

「ああ、その場合お前達の身分は隠してもらい、メイドとして連れていくことになるだろう。そうなれば今までのような暮らしはできなくなる」

三人とも生粋の貴族であり、働くこととは無縁の人生であつたはずなので、使用人としての生活は想像以上に厳しいものとなるだろう。

セリアとクレアはその厳しさが想像できないのか、俺の話を聞いてもいまいち理解できていなような表情を浮かべているが、メルヴィナは俺の話を理解してある程度はその大変さを想像できているのか、微笑みを消して真剣な顔つきになっていた。

「そのお話、断つた場合はどうなるのでしょうか？」

「その場合はここに留まってもらう。今までのような生活は保証されるが、もしどこかからお前達の存在が漏れてしまえば、敵国の貴族として捕らえられて終わりだ」

「分かりました。では私達はヤード様と共に王都へと参りましょう。もとよりヤード様と離れるような選択をすることはありません。娘達も同じ気持ちだと思えます」

セリアとクレアはメルヴィナの言葉に同意するように頷いていた。あまり事の重大さが分かつて

いないような気もしたが、本人が選んだならば是非もない。

「そうか、ではお前達も連れていくことにしよう。お前達には苦勞を掛けることになるが、何かあれば言ってくれ。私のできる範囲でならば善処しよう」

「あ、それなら一つお願いがあります」

今まで黙っていたクレアが、その言葉を待っていたかのように食いついてきた。

※

夜も更けて外が闇に包まれた頃、俺がベッドに横になっていると、部屋の扉が開く音がした。薄暗い中で月明かりを頼りに入ってきた影は二つ。褐色の肌が暗闇にまぎれて少し見え辛いが、月光が照らし出したその人物は、セリアとクレアだった。

二人は足音も立てずにベッドの傍まで近付くと、着ていた服を脱ぎ捨てて上がってきた。そして俺を扶むように左右に横になって、二人とも俺に抱きついてきた。

「随分と遅かったな」

「それは、その、準備に時間が掛かったので……」

俺の質問に、セリアは恥ずかしそうに目を逸らしながら答えた。年頃の娘なので夜伽をするにも色々と準備が必要なのだろう。

彼女の身体からは仄かに香水の匂いが漂っていた。無粋な質問をしてしまったお詫びとして、彼女の額に口付けしてやると、照れながらも嬉しそうな顔を見せた。

「むう、私のことも忘れないで下さい」

クレアは姉が先に構われているのがお気に召さなかったようで、自分にも構って欲しいとばかりに薄い胸を腕に擦り付けて俺の気を引こうとしていた。

姉と比べると少々幼い反応に苦笑しそうになるのを堪えて、彼女にも求められるままに口付けをしてやった。

以前は本当に唇を合わせるだけだった口付けも、いつの間にか自分から舌を入れてくるようになっていた。まだ上手く息ができないようだが、幼さの残る顔立ちの彼女が俺に奉仕しようと懸命に舌を絡ませてくる背德的な行為は、いつもとは違った興奮を与えてくれる。

クレアとの口付けを続けていると、手持ち無沙汰になったセリアが俺の首元に顔を埋めて舐め始めた。熱い吐息と共に、舌の少しざらざらとした感触が俺の首筋を這っているのが分かる。時折吸い付いたり、甘噛みしたりして俺の反応を確かめているようだ。

それと同時に彼女は俺の下半身へと手を伸ばし、指の先で肉棒を捉えようと、服の上から先端を中に弄り始めた。それも僅かに感触が感じられるかどうかといった力加減だった。

絶妙な力加減の刺激は、直接触られるのとは違って少々もどかしさを感じてしまい、もっと刺激が欲しいとばかりに、無意識に彼女を引き寄せて抱きしめていた。

「んんっ……ふっ……」

姉の行動に張り合うように、クレアは口付けを続けながらも姉と同じように手を俺の下半身へと伸ばし、服の上から俺の物をゆっくりと撫でて刺激してきた。柔らかな手のひらで撫で回すように擦りながら、次第に興奮で彼女の息が熱を帯び、呼吸も少しずつ荒くなってきた。

彼女達のような美少女姉妹に、競い合うように奉仕をしてもらうことによって、優越感と共に興奮も高まってきており、服を着たままでは少し辛いほどに肉棒も硬く勃起していた。そのことは二人もよく分かっているようで、二人は一日奉仕の手を止めていた。

「セリア、クレア。俺は一切動かずに、お前達が奉仕をしてくれるという話だったな？」

「はい、ヤード様は先日の戦いでお疲れだと思いましたが」

「お姉様、提案したのは私ですよ」

昼間、メルヴィナ達に今後の話をした後、できる範囲でなら願いを聞いてやると言った瞬間にクレアが俺への奉仕をしたいと言い出したのだ。特に断る理由もないので受けたのだが、その話を傍らで聞いていたオリンピアの表情が物凄いいことになっていた。

ともかくそんなわけで、今日は横になったまま、行為は全て彼女達に委ねることになっている。確かに腰を振るのも体力を使うので、動かなくていいのは素直に嬉しい。

「大丈夫です。お姉様と一緒に、お母様から男の人を満足させる手法は教わりました」

「もう、クレア！ そういうことは言わなくていいの！」

自信に満ちた表情で技を教えてもらったことを伝えてきたクレアに対し、セリアは秘密にしておきたかったらしく、薄暗い中でも分かるほどに顔を真っ赤にしながら妹に抗議していた。

「んん、こほんつ。……ではヤード様、始めさせてもらいますね」

先ほどのやり取りを誤魔化すように軽く咳をした後、二人は俺の下半身のほうへと身体をずらし、服を脱がせて俺の物を露出させると、向かい合った状態からお互いの胸で俺の肉棒を挟み込んだ。

だが、クレアの胸は僅かな膨らみがあるだけなので、当然ながらセリアの胸の谷間に大部分が挟まる形となった。

「……お姉様のように、上手く挟めません」

クレアは何とか谷間を作ろうと横から肉を持ってこようとしていたが、人形のように細い彼女の身体には持つてこられるほどの肉が付いていなかったようだ。

彼女達がやろうとしている行為は何となく予想がつく。二人の胸で肉棒を挟んでパイプリーをしようとしていたのだろう。

だがしかし、それをするには明らかに胸の膨らみが足りなかった。何度か試した後で本人もそのことは十分に理解したようで、谷間を作るのを諦めていた。

二人は俺の肉棒に唾液を垂らして滑りをよくした後、胸を使って扱き始めた。ぬちゃぬちゃと粘着質な音を響かせながら息の合った動きで肉棒を扱かれるのは、想像以上に気持ちよかった。

窓から差す月明かりが二人の唾液に濡れた褐色肌を仄かに照らし出し、年に見合わない怪しげな魅力を醸し出しているのも、俺の興奮を煽ってきていた。

「ど、どうでしょうか、ヤード様？」

「ああ、なかなかのものだ。そのまま続けてくれ」

セリアの胸は既に女性として十分なほど育っている割にまだ成長途中のようで、肉棒を柔らかく包み込みながらもまだ芯に硬いものが残っている感触があった。この調子で育っていったのなら、将来は母親と同等以上の巨乳になることだろう。



以前よりも積極的に動くようにはなっていたが、まだ男女の行為に対し恥じらいも残っているらしく、困ったように眉を顰めながらも頬を赤く染めて俺の物に奉仕している姿がいじらしい。

「お姉様ずるいです！ 私ももつと胸が大きかったら、ヤード様に喜んでもらえるのに！」

クレアも姉と同じように胸で俺の物を扱おうとはしているが、挟めるだけの物を持っていないので、あまり起伏のない胸で擦るだけとなっていた。将来は胸も大きくなるのだろうか、今の彼女には胸の脂肪どころか全身に余計な肉が付いていないので、肋骨の硬い感触まで伝わってきている。

だが彼女の滑らかな肌に擦れる感触だけでも十分に快感は得られるし、薄い胸を懸命に使って俺に奉仕をしている姿を見れば、肉棒に与えられる快感以上に精神的な充足感を得ることができた。

「クレア、お前の熱意は伝わっている。今胸がないからと悲観することははない」

「は、はい！ 有り難うございます！」

慰めとしては微妙な言葉だったが、その一言で元氣を取り戻してくれたようだ。奉仕にも熱が入り、二人の胸から飛び出た肉棒の先端を手のひらで優しく撫で回してきた。先端は敏感なので、かなりの快感に思わず腰が引けそうになるのを堪えながら、彼女の奉仕を受け入れる。

そしてセリアも妹の勢いに負けないよう、自分の胸ごと肉棒を左右から捏ね回すようにしてきた。ちようど裏筋の辺りが刺激されて、こちらも結構な快感を味わわせてもらった。

二人とも以前よりも格段に夜伽のスキルが上がっていた。おそらく全て母親であるメルヴィナから仕込まれた技なのだろうが、ここまで彼女達が上達するとは思ってもいなかった。

「あ、何か出てきました！ あれ？ でも白くないですね」

「それは射精じゃなくて、その……気持ちよくなったときに出る物だって教わったでしょ」

クレアは液体の正体が分かった後も、手に付いたそれを不思議そうに見ていたが、動きが止まっていたのをセリアに急かされて、慌てて奉仕を再開した。

二人の熱心な奉仕のおかげで、俺も大分余裕がなくなってきた。正直二人の胸での奉仕は期待しなかったが、いい意味で期待を裏切ってくれていた。

俺が普段相手にしているのはソフィやティアのような巨乳の持ち主ばかりなので、いまいち残念な胸の持ち主との経験はなかったが、彼女達のおかげで新たな境地を発見できた気がする。

「さっきよりピクピクしてる……そろそろ出そうなのかも」

「本当ですか、お姉様？　じゃあもつと気持ちよくなってもらわないとダメですね」

俺の絶頂が近いことを知ったクレアは、細い指で鈴口を刺激してきた。普段触られることのない部位を集中的に攻められることにより、今までの巧みな技により残り少なかった俺の我慢も限界となり、堪えきれずに射精してしまった。

「きゃっ!？」

「凄い……男の人の射精はこんな風にするのですね」

勢いよく出た精液が彼女達の顔や胸に掛かり、褐色の肌を白い物で汚していく。二人はそれが嫌がるどころか、自分の顔や胸に付いた物を指で掬い取って舐めていた。

「お姉様、ここにも付いていますよ」

「あ、ちょっとクレア、私の分を取らないで」

クレアは姉に顔を近付けると、舌を伸ばして取り切れていなかった精液を舐め取った。だがセリアは自分の分を取られるのが気に食わなかったようで、まだ精液を飲み込んではいなかった妹の口に無理やり舌を入れて、取られた分を取り戻そうとしていた。姉妹が俺の精液を求めて舌を絡め合っている光景には素晴らしいものを感じた。

そして自分の身体に付いた分を取り終わったセリアは、妹が酸欠で朦朧としている隙に俺の肉棒を咥えて、手で扱きながら中に残っていた精液を吸い出していった。だが敏感になっているところ刺激が加わったことにより、俺の肉棒が再び硬さを取り戻していた。

「あ!! お姉様、ずるいです!」

「油断していたクレアが悪いと思うけど……それじゃ、この後は譲ってあげる」

「うう……本当ですか? もう約束しましたからね?」

先を越されて悲しそうな声を出していたクレアだったが、姉の言葉ですぐに気を持ち直した。そして俺の身体を跨ぐように膝立ちになり、肉棒の先端を自らの秘裂に宛がった。

先ほどの奉仕で挿入には十分なほどの愛液が溢れ出ており、滑りがよくなっているせいで肉棒を入れようとしては外れてしまうのを何回か繰り返し返した後、割れ目に肉棒の先端が少し沈み込んだ。

「ヤード様、次はここでご奉仕させていただきます」

待ちきれないといった様子で俺へ言葉を掛けた後、ゆっくりと腰を下ろしていった。

まだ小さい割れ目を広げながら肉棒が沈み込んでいくが、経験が少ない上にまだ性的に身体が整っていないのもあって、少し入れるだけでもかなりの抵抗と締め付けがある。

「んっ、ふう……ん、んっ」

苦しうに表情を歪めながらも何とか奥まで挿入できたのまではよかったが、彼女の膣口は俺の物をしつかりと締め付けており、そこから腰を動かすのは厳しいようだ。

「クレア、苦しいのならばあまり無理をしなくてもいいぞ？」

「い、いえ……大丈夫です。頑張ります」

肉棒をかなりきつく締め付けながらも動き始めたクレア。その姿を見かねたのか、徐おもろろにセリアが彼女の後ろから抱きつくと、妹のツルツルとした肌の上で手を滑らせて、彼女の弱点でもあるクリトリスを指で軽く押し潰すように摘んだ。

「ああっ!? お、姉様っ!」

「クレア、もつと力を抜きなさい。でないとヤード様の物を入れたまま動けないでしょ？」

妹を一度驚かせた後、今度は痛みで強張った身体を解すように優しく愛撫を始めた。時折敏感なところを刺激しながらも、セリアの指がクレアの未熟な胸やほっそりとしたお腹の上を這いまわる。姉妹が絡み合っている光景は素晴らしく、自然とこちらの肉棒も硬さを増した。だが次第にリラックスして解れたクレアの膣内は、大きくなってしまった俺の物も何とか収めることができた。

それはクレアも理解したようで、姉に愛撫を続けられながらも、さほど抵抗もなくスムーズに腰を振り始めることができたようだ。

「んっ、ヤード様、どうですか？」

自らクリトリスを擦り付けるように腰を前後に動かしながら、蕩けた声で尋ねてきた。その表情

には幼い背丈に似合わない淫蕩さを感じさせるものがあつた。

擦り付けられた俺の下腹部は溢れ出た彼女の愛液でしどに濡れており、彼女の股間と擦れるたびに粘着質な水音を響かせてこちらの興奮を煽ってきている。

自分も快感を得ているようで、時折膣内がきゅっと締め付けを強くするのだが、先ほどよりも具合のよくなつたおかげで、俺の肉棒を締め付けるのにちょうどいい力加減になっていた。それを続けられれば、先ほど出したばかりの俺の物も予想以上に早く限界を迎えそうになっていた。

「や、ヤード様のがっ！ ビクビクしてきました、ああっ！」

「くっ！ されるだけというのも、なかなか辛いものだな！」

俺がそろそろ限界なのを感じたクレアは、さらに腰の動きを大きくして、俺の射精を促してきた。自分でやるならばペースを調節できるのだが、こうやって奉仕されるだけだとそれも難しい。特に寝転がった状態では力も入れにくいいため、彼女の攻めにあつさりと陥落し、俺は絶頂を迎えた。

「クレア、出さぞ！」

「はい！ あああああああっ！」

俺の精液がクレアの膣内に勢いよく打ち付けられ、その快感で彼女も絶頂したようだ。俺の物を搾り取るような膣の動きは、彼女の身体も既に女性としての働きを始めていることを感じさせる。

俺の上でビクビクと身体を震わせた後、ぐつたりと俺のほうに身体を預けてきた。結合部からは俺の精液と彼女の愛液が混ざり合つて泡立つたものが垂れてきていた。

「はあ……ヤード様のお胤たねでいっぱいです」

「はい、クレアはこれでお仕舞いね。次は私の番だから、早く退いて」

「え？ きゃあつ！」

絶頂の余韻を感じつつ、嬉しそうに自らの下腹部を触りながらそう呟いたクレアを、徐にセリアが引き剥がした。少しくらいは休ませてやってもよさそうなのだが、どうやら妹が乱れていた姿に当てられて、待ちきれないほどに興奮してしまっているようだ。

満足そうな笑顔から一転して不満がありありと表れた表情で姉を睨みつけていたが、当の本人は全くこたえていないようだ。彼女達にとつて、この程度のやり取りは日常茶飯事なのだろう。

妹の抗議の視線を軽く受け流したセリアは、今出したばかりの肉棒へと顔を近付け、精液と愛液でべったりと汚れたそれを躊躇いなく口に咥え、汚れを落とすように舐め始めた。

身内とはいえ同性の愛液を舐めるのには抵抗がありそうな気もしたが、よく考えれば先ほども姉妹で口付けをしていたような気もする。そういったことは気にならない性質なのだろうか。

「んっ、凄くヤード様の匂いがする……」

肉棒に付いた精液を全部舐め取り飲み込んだ後、一瞬だが恍惚とした表情を見せていた。その光景に興奮を覚えたのと、舌で刺激されたことにより、俺の肉棒も再度硬さを取り戻していた。

セリアも妹と同じように俺を跨ぐように膝立ちとなり、同じように肉棒を秘裂に宛がった。

「ヤード様、それでは始めさせてもらいますね？」

「ああ、いつでもいいぞ」

俺の許可を得たセリアが腰を下ろすと、クレアのとときは違ってスムーズに挿入することができ

た。入れる際にほとんど抵抗はなかったが、決して緩くなっているわけではなく、ある程度は締め付けを自分の意思で調整しているようだ。

実際締め付けの強弱をつけることによって、まるで手で扱われているかのような感覚を味わっている。妹のほうは全体的にかなりきつくなっていたが、妹と同じ回数しか経験していない彼女がここまで巧みな技術を身につけているとは予想もしていなかった。メルヴィナも知識やある程度の技術を教えることはできるが、締め付けの技術を伝えるのは流石に無理があるだろう。

疑うような視線から俺の考えを読み取ったのか、彼女は何かを伝えようと口を開き、やはり考えを変えたのか、途中で口を噤んで恥ずかしそうに顔を逸らしつつ、横目で俺を見つめてきた。

「その……自分で練習しました……」

そう言い切った後、羞恥心が限界を迎えたようで、顔を真っ赤に染めて俯いた。特に自白を強要したわけではないのだが、見事に自爆したようだ。照れるのは構わないのだが、動きが止まっているのはいただけないと思う。

「そうか、ではその成果を見せてもらおうか」

「は、はい！」

俺の一言は相当嬉しかったようだ。恥ずかしさで泣き出す一歩手前くらいになっていた顔が一瞬で笑顔になり、膣内も彼女の喜びを表しているかのように俺の物を強く締め付けた。

それからの彼女のテクニクは妹の比ではなかった。まだ処女を失ってそれほど時間も経っていないというのに、男を喜ばせるための技は経験豊富な女性陣に少し劣る程度にまで上達しており、

三回目で少し性欲もなくなってきた俺にも通用していた。

腰を上下や前後に動かすだけでなく、ときには円を描くように回し、腰を振る速さにも緩急をつけて飽きさせないようにしているだけでなく、膣内も締め付けを巧みに操って俺を翻弄していた。

「ああっ！ ヤード様、ヤード様あー！」

当然彼女も自分の身体を使つて奉仕しているため、俺の肉棒に何度も奥まで貫かれて、俺の名前を叫びながら情欲に蕩けた顔を晒していた。妹よりも恥ずかしがり屋だと思つていたのだが、一度箍たがが外れてしまえば妹以上に積極的になるようだ。

「ぐっ、そろそろ限界のようだ！」

「は、はい！ 私もそろそろイッちゃいま、あ、あああああ！」

俺よりも先にセリアのほうが絶頂してしまつたようだ。俺の物を逃がさないとはかりに膣内は今まで以上の締めまりを見せ、その刺激が最後の引き金となり、俺の上で絶頂の快感を味わっている彼女の中にたつぷりと精液を注ぎ込んでやることとなつた。

俺の射精が終わつた後もまだ小さく身体を跳ねさせている彼女を下ろし、妹とは反対側に寝かせてやると、嬉しそうに俺の身体へと身を擦り寄せてきた。

「ヤード様、次はまた私の番ですよね？」

姉の奉仕が終わつたので次は自分の番だとはかりに俺の上に乗ろうとしてくるクレアを止める。彼女達はまだ一回ずつしかやっていないため体力が余っているようだが、俺はもう三回連続で射精しているため、体力の消耗具合は彼女達の比ではない。

「クレア、悪いがこれ以上続けるのは厳しい。逆に体力を使い果たしてしまいそうだ」

「そうですか、分かりました……」

少し残念そうな顔をしたクレアが、姉と同じようにベッドに横になって俺の身体へと擦り寄ってきたので、姉妹に挟まれながら寝転がっている形となった。

「ヤード様、その、満足してもらえたのでしょうか？」

「ああ、十分だ」

少し時間を置いたおかげで普段通りに戻ったセリアは、恥ずかしそうに視線を逸らしている。そんな彼女と、ついでにクレアも。二人の働きを労うように頭を撫でながら、そろそろ眠気も襲ってきたことなので、二人を横に待らしたまま寝ることにした。

※

翌朝、部屋の扉を叩く音で目が覚めた。汗でべとつく身体を拭いて身支度を整え、隣で寝ていた二人を起こさないよう静かに部屋を出ると、外にいたオリンピアが声を掛けてきた。ほんの僅かだが、焦って落ち着きがなくなっているような雰囲気を感じる。

「ご主人様、お客様がお見えになっています」

「客？ 一体誰だ？」

「エレインという方です。王国軍に協力している方だと聞きました」

「ああ、確かにそれは私の知り合いだ。すぐ向かうでしょう」

オリンピアに案内されて応接間に向かうと、そこにはいつもと変わらぬ無表情で使用人に接待を

受けているエレインの姿があり、傍には帯剣した護衛役のエルフが立っていた。俺が部屋に入ってきたのを見ると、無表情だった口元が微かに嬉しそうに上がっていた。

「済まないな。つい先ほど起きたところで準備に少し手間が掛かった」

「いえ、それほど待っていたわけでもないのです、どうかお気になさらず」

「そうか。それにしてもこんなに朝早くに訪ねてくるとは、何の用事だ？」

座りながらエレインに尋ねると、彼女は不思議そうに首を傾げながら俺の顔を見つめてきた。

彼女が訪ねてきた理由は当然俺も知っているものとして話していたようだが、特に心当たりがない。不祥事が起きたという報告は入っていないし、彼女と何か約束をしていたわけでもない。

「王国との約束では私達が王国軍に協力するのは帝都を占領するまでとなっていたので、軍に協力するのは本日までと数日前に伝えさせてもらいました。が、明日レシアーナへ帰る前に改めて一言ご挨拶を、と思っていたのですが……まだご存じなかったのですか？」

エレイン達レシアーナのエルフが帝都襲撃までは協力する手筈てはずとなっていたのは知っていたが、撤退に関しては状況を見てエレインのほうから連絡することとなっており、明日撤退することはまだ報告が来ていなかった。

オリンピックアのほうに視線を向けると、冷静に見える顔を一筋の汗が伝うのが見えた。どうやら彼女は今の話を聞いていたらしい。つまり彼女が報告を上げていなかったことになる。

エルフが抜けるのは戦力の大幅な低下だ。魔帝国の魔術兵団を一部取り込めたので、実際の戦力にそこまで影響は出ないだろうが、責任者にまで報告が届いていないのは明らかに問題だろう。

「いや、撤退の日程を少し失念してただけだ。レシアーナの者がここで抜けるのは当初の予定通りなので問題は無い」

ため息を吐きたくなる気持ちを抑えてエレインに視線を戻し、あたかも知っていた体で話を進めることにした。身内の他に聞いている人間はいないとはいえ、指揮下に組み込まれている部隊の予定も知らないと思えるほど馬鹿正直ではない。

それにエレインほどの相手ならばすぐに状況を察してくれることだろうという期待もある。

「そうですか、私の勘違いだったようですね。どうかお許しを」

「いや、こちらの対応が誤解を与えたのだ。謝ってもらう必要はない」

そして俺の考え通り、エレインは空気を読んだ発言をしてくれた。これでオリンピアの失態が許されたわけではないが、表面上は何の問題もなかったと言い張ることができる。

今は一般人だが、数日前までは彼女も軍の一員であったため、言葉に出してしまうと懲罰の対象となってしまう。しかし何事もなかったのなら懲罰の必要はない。まあ特に関係のないお仕置きを与えることはあるかもしれないが、それは王国軍とは何の関係もない話だ。

「短い間でしたが、ヤード様と共に戦えたことは私達にとっても大変有意義なものでした。また今度レシアーナを訪ねて下さい。貴方ならば他の者も歓迎してくれるでしょう」

「そうだな、考えておこう」

明日には彼女達もレシアーナに帰ってしまうのか。まあ周辺貴族は碌に私設軍も持っていないので、今から戦力を集めようとしてもかなりの時間が掛かる。数ヶ月程度ならば帝都の防衛はエルフ

がいなくなっても大丈夫なはずだ。

「では他にも回るところがありますので、私はこれで」

「ん？ ああ、そうか。何のもてなしもできずに済まないな」

「ふふ、気にすることはありませんよ……と、普通ならば言うところなのでしょうが、折角なので最後に一つだけ我が儘に振る舞ってもよろしいでしょうか？」

彼女はそう言って俺へと近付いてくると、首筋に顔を埋めて口を付けてきた。あまりに予想外の行動に彼女以外の者が凍り付いている中、彼女はゆっくりと口を離した。

彼女が離れた後、いつの間にか俺の首にネックレスが着けられているのに気が付いた。魔石が着けられたそのネックレスからは微かな魔力を感じ、魔道具であることはすぐに分かった。

「それは私と魔術的な繋がりを持っています。私に何かあったときはその魔石が砕けますので、そのときは助けに来て下さると嬉しいですね」

「……ああ、ではそのときは必ず駆けつけよう」

「ええ、約束ですよ？」

俺の返事に面白そうに微笑んだ彼女は、ひらひらと手を振りつつ部屋を出ていった。

彼女が出ていった後、玄関まで案内する役だった使用人が慌てて彼女を追いかけていったのを眺める。オリンピアの信じられないものを見たと言わんばかりの表情は気付かなかったことにした。

「……ご主人様。首のところ、跡が残っていますよ」

「さて、我々もそう遠くないうちに王都へ向かうのだ、そろそろ準備に取り掛かるべきだな」

ネックレスを避けて首筋を触ってみると、確かに少し違和感のようなものを感じた。幸い目立たない位置にあるので、服で上手く誤魔化すこともできるだろう。俺は咎めるようなオリンピアの視線を華麗に無視しつつ部屋を出た。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>